

英語教材としての映画の可能性

— 大学英語授業を例に —

教育内容開発コース ショルティ沙織
東京理科大学 梶木 貴之

Possibilities of English Movies as Teaching Materials:
A Case Study of Teaching English in a University

Saori SCHULTE
Takayuki MASAKI

The present study illustrates teaching materials utilizing an English movie in an English classroom in a university, and how students use the elements of the movie such as the imagery or the sounds to understand and produce English expressions that are appropriate in certain contexts. The teaching materials were designed for four experimental lessons, which included some activities that require students to use their pragmatic knowledge. Through analyzing the students' comments left on the questionnaire surveys and worksheets, we found that the imagery and the sounds give them various types of information such as facial expressions, tone of voice, and the atmosphere of the scene, which help them grasp the contextual meanings and create appropriate English expressions. The results also showed that they worked on the activities using those elements of the movie by understanding the characters' feelings, understanding and imagining the contents of the story, noticing the variety of English expressions, and predicting English expressions when they encountered words that they did not know.

目 次

1. 研究の背景
2. 研究の目的と方法
3. 実践の内容
 - 3.1 対象
 - 3.2 年間シラバス上の位置づけ
 - 3.3 使用する映画
 - 3.4 指導目標
 - 3.5 授業展開
 - 3.6 教材の構成
 - 3.7 活動の詳細
4. 分析
 - 4.1 方法
 - 4.2 アンケートの記述
 - 4.3 解答用紙の記述
5. 考察
6. おわりに

1. 研究の背景

今日の大学英語教育において、大きな目的となっているのは英語運用能力の育成である。大学英語教員は学習者が高等学校までの英語授業で習得した知識・技能を把握した上で、それを土台に、さらに英語運用能力を高めていくことが期待されている。そのために検討できる事柄は教授法やカリキュラム、評価方法など様々あるが、その一つとして挙げられるものに教材がある。この教材という観点から大学英語教育を眺めたときに、中学校や高等学校と比較して言えるのは、教材の自由度が高いという点である。中高では多くの場合、検定教科書の中から使用教科書を選び、授業を行うことになる。その結果、扱える英文の種類はいくぶん制限されることになる。それに対して大学では、どのような教材を用いるかは担当教員の裁量にゆだねられている場合が多く、その場合、教員は学生の英語力を念頭に、さらには自身の問題意識やバックグラウンドを踏まえながら、扱う英語素材を選択することになる。

数ある英語素材の中で本論文が焦点を当てたいのは映画である。英語映画を教材として用いる理由は授業者によって異なるが、これまでに執筆者らは「語用論的な力」を有効に育成できる素材として注目してきた。この能力に関する代表的な先行研究としては石原・コーエン (2015) があり、同書は「語用論的な力」を「社会文化的規範についての知識や理解、そうしたものを応用し、他者とのコミュニケーションにおいて運用できる能力」(石原・コーエン 2015: 2) と定義した上で、「語用論的能力があるということは、言われたり書かれたりする文字どおりの意味を超えて、話し手や書き手の意図する意味、想定、目的、さまざまな言動などを理解できることを意味する」(石原・コーエン 2015: 3) と説明している。執筆者らは上記の定義を踏まえつつ、理解と表現の側面を明確に分け、「語用論的な力」を「1. 具体的な場面において英語の発話がどのような意味を持つのかを理解する能力」と「2. 具体的な場面において英語の発話がどのような意味を持つのかを踏まえ英語で表現する能力」の二つから構成される能力と定義した。映画は映像と音声に伴う形で具体的な場面が設定されているという点において、「語用論的な力」を育成する上で有効な教材になると考えられる。

このことを検証するために、これまでに二度の実践を行ったが、その結論として示唆されたのは、「英語映画は語用論的能力を育成することに資する」ということである。川崎・榎木 (2016) が扱った一度目の実践では、主に1の側面に注目し、学生の記述解答とアンケート結果を分析した。その結果、きわめて限定的ではあるが、「語用論的な力」の伸びが確認できた。また、ショルティ・榎木 (2017) が扱った二度目の実践では、主に2の側面に注目し、学生の記述解答とアンケート結果を分析したが、その結果、学生が映画に含まれる情報を活用しながら、個々の発話が文脈に応じてどのような意味を持つのかについて考察する記述を確認できた。

しかし、一方で課題も残った。それは「学習者は映画に含まれるいかなる情報をどのように活用し、理解・表現を行っているのか」という点に関する検証が不十分であるという点である。ショルティ・榎木 (2017) は「文脈を把握する上で、文字情報以外に、音声と映像の情報をも活用できることが英語映画を教材化した際の大きな特徴である」(ショルティ・榎木 2017: 422) と述べているが、実際に学習者が音声と映像をどのように活用しているのかについては、十分に明らかになっていない。この点について、具体的

教材に即して考察を行うことが、現在の研究に求められている事柄の一つと言えよう。

2. 研究の目的と方法

以上の状況を踏まえ、本論文の目的は、「学習者は映画に含まれるいかなる情報をどのように活用し、理解・表現を行っているのか」という問いについて検証することである。その際、本論文ではショルティ・榎木 (2017) に引きつづき、「語用論的な力」のうち、主に2の「表現」の側面に注目する。具体的には映画の一場面についてスクリプトを与え、その中に設けた空所に文脈に合った表現を補充する活動を課し、記述解答を分析する。ただし、今回は実践の対象となる学生がまとまった量の作文を苦手としているため、補充する表現は一語から数語に止めることにし、今後の実践で段階的に増やしていくこととしたい。

実践に際しては、まず授業者(本章の執筆者)と共著者が協力して授業案、ワークシート、アンケートを作成した。その上で実践当日、授業者は授業案にしたがって授業を行い、実践後は共著者とともにワークシートとアンケートを分析し、記述を行った。

3. 実践の内容

3.1 対象

本実践の対象は、首都圏私立大学機械工学科1年生37名、建築学科1年生68名、電気工学科1年生34名、の4クラス計139名(履修登録者数)である。講座名は1年生を対象とした必修教養科目「A英語2」で、この講座はリーディングを中心に総合的な英語力を養成することを目的とした通年科目となっている。研究の対象とするのは2017年5月23日から6月23日の間に行われた各クラス4回(各90分)の授業である。この授業を履修する学生の多くは基本的な単語・文法・発音等の知識があり、高等学校までの英語学習に一定の時間を割いたことがうかがえる。

3.2 年間シラバス上の位置づけ

上記の必修教養科目「A英語2」では、各授業担当者がそれぞれ授業目標を定め、それに合わせて使用教材を決定している。本実践の授業者(本章の執筆者)は以下のような年間目標を設定した。

【年間目標】

- ①単語の意味、文の構造を踏まえ、英文を理解することができる。
- ②理解した内容を適切な日本語で表現することができる。
- ③内容（何が書いてあるか）だけでなく、表現方法（どう書いてあるか）について説明できる。
- ④自身で基礎的な英語表現を行うことができる。

本授業の特徴は③と④である。まず③について、第1章で大学英語教員は学習者が高等学校までの英語授業を通して身に付けた知識・技能を土台にすると述べたが、もう一つ、土台にできるものがある。それは学習者が高等学校までの「国語授業」を通して学習した事柄である。教材という観点から高等学校までの「国語」を眺めると、一つの特徴は教科書に多様なジャンルの文章が収録されている点である。これは文部科学省の意図するところであり、例えば、2009年版高等学校学習指導要領「国語」における「現代文B」の目標は、「近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高める」（文部科学省2010a:104）となっている。この解説を参照すると、「言語文化として価値が高く、現代の文化や思想に深くかかわるような文章はもちろん、現代の社会生活で必要となる実用的な文章や、翻訳の文章、近代以降の文語文及び演劇や映画の作品なども含めて考えることが大切である」（文部科学省2010a:49）とあり、様々なジャンルの文章を扱うことの重要性が強調されている。本授業ではこのような高等学校の「国語」のあり方と連続性を持たせることで、母語と外国語を問わず、表現方法に対して敏感な感覚を持った学生を育てたいと考えた。

表現方法に対して敏感になる上で有効な方法は、自身で表現を行うことである。そこで、重要になってくるのが④である。本授業では市販の教科書は指定せず、授業担当者（執筆者）が独自に様々なジャンルの英語素材を集め、各ジャンルの特性に合わせた表現活動を設定した。以下がジャンルを基準に年間計画を立てた「ジャンル別シラバス」である。

【年間授業計画】

〈前期〉

第1回：アニメ

第2回～第4回：レクチャー

第5回：洋楽

第6回～第9回：映画（本実践）

第10回～第11回：エッセイ

第12回～第14回：スピーチ

第15回：まとめ

〈後期〉

第1回～第2回：絵本

第3回～第5回：レクチャー

第6回～第9回：映画

第10回～第11回：小説

第12回～第14回：スピーチ

第15回：まとめ

執筆者はこの「ジャンル別シラバス」によって授業を行って5年目になるが、その間、学生の活動を促す上で有効であったと考えられる素材は残し、そうではなかったものは別の素材と入れ替えてきた。そうして残っているのが上記のジャンルである。前期・後期合わせて11の素材からなるが、いずれも選定の際は他の素材とは異なった特徴を有しているよう配慮した。例えば、アニメは日本の作品の英語版であり、オリジナル版のリズムや日本的な表現がどう英訳されているかという観点から見るができる。前期と後期に一度ずつ扱うレクチャーは、いずれもアメリカの大学における英語講義で、ある程度の専門性のある内容が平易な英語で表現されている。洋楽はメロディーを伴っている点が特徴であり、リズムに合うよう単語が選択されている。ここで扱うのはイギリスの有名ロック・バンドの作品なので、アメリカ英語との違いを聴くこともできる。エッセイは大学英語教科書から取った説明文で、図表を含み、論理構成がしっかりした内容となっている。前期と後期で二度扱うスピーチは、一つがアメリカの大学生に向けた行われたもので、もう一つが全世界の人々を対象に行われたものとなっている。いずれも場に合わせて慎重に言葉が選ばれており、印象的な比喻表現も含まれている。絵本は子ども向けの内容ではあるが、様々な解釈が可能であり、読み聞かせに用いられることを念頭にリズムに配慮された言葉選びとなっている。小説はフランス語を原文とする作品の英訳ではあるが、原文のリズムや曖昧さが英訳にも生きている。この中において、映画は映像と音声を伴う点ではレクチャーやスピーチと類似し、ストーリーがあるという点では絵本や小説と似通っているという形で、独特の位置を占めている。

3.3 使用する映画

本実践で使用する映画は『イルマーレ』である。こ

の映画は2000年に韓国で製作された映画『イルマーレ』が、2006年にアメリカでリメイクされたもので、アメリカ版のタイトルは *The Lake House* となっている。主人公は建築家の Alex と医者 of Kate の二人であり、物語は Kate が湖畔の家から引っ越して行った後、Alex がその家に引っ越して来るところから始まる。ある日、Kate は次の住人 (Alex) に宛てて手紙を書き、届いた手紙があれば記載の住所に転送するよう頼むのだが、Alex が確認してみると、その住所に住居はない。二人は不思議に思いながらやりとりを重ねていくうちに、Alex が生きているのは2004年、Kate が生きているのは2006年であることに気づく。つまり、Alex と Kate は湖畔のポストを通して、時空を超えたやりとりをしているのである。その後、二人は手紙を通し、しだいにお互いのことを話し始める。そして、何とかして会う手段はないかを考え始める。このように、『イルマーレ』は恋愛映画であるのだが、同時にSFの要素を含んでいる。

教材としてこの映画を選んだ理由は三つある。一つは「時間」という概念に対する問いかけを含んでいる点である。この物語は未来を知ったことで過去を変えてしまう、いわゆる「タイム・パラドックス」の問題を扱っている。我々は日常生活で過去を変えたいと思うことがあるが、実際にそれはできない。しかし、もしそれをできる機会が与えられたとき、歴史を変えるかどうかというのは難しい問題である。近年、類似したテーマを扱った映画としては『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』(2016) と『君の名は。』(2016) があり、いずれも大きな話題を呼んだ。事前に行ったアンケートから、学生の多くがいずれかの作品を観ていたことから、『イルマーレ』も大学生の関心を引くものであると考えた。

二つ目は恋愛映画でありながらも、英語文化に対する教養を身につけることができる点である。一例を挙げると、この映画で Kate はイギリスの作家 Jane Austen の書いた *Persuasion* (1818) を愛読している。ある日、Alex は同じ2004年を生きる Kate と話す機会があり、*Persuasion* の内容について尋ねるが、それに対し、Kate は *waiting* をテーマとする作品であると説明する。この場面から振り返ると、それまでに幾度か *wait* / *waiting* という言葉が使われており、映画の終盤では Kate が *Persuasion* の一節を読み上げる場面もある。つまり『イルマーレ』は *Persuasion* を下敷きとした作品となっている。このような点について知ることは、学生の英語文化に対する教養を深める一助となる。

三つ目は過去三年に渡りこの映画を用いたパイロット実践を行う中で、教育上問題となる場面がほぼないことが確認できている点である。『イルマーレ』の登場人物は標準的な英語を話し、スラングはほとんど用いられない。また、性や暴力に関する描写もほとんどなく、教室で使用する上で支障がないと判断することができた。

3.4 指導目標

本実践では以下の二つを指導目標に定めた。

- ①映像、音声、英語字幕、スクリプトを利用しながら、映画中の単語・文法について理解する。
- ②「具体的な場面において英語の発話がどのような意味を持つのかを理解する能力」と「具体的な場面において英語の発話がどのような意味を持つのかを踏まえ英語で表現する能力」を向上させる。

3.5 授業展開

計4回の授業のうち、第1日の授業展開をまとめたのが以下の表である。

	授業展開	時間	活動形態
1	前回の解答用紙の返却 ワークシート1枚目の配布 解答用紙の配布	8分	
2	場面1の語句の理解	5分	
3	場面1の視聴 ワークシート2枚目の配布	12分	
4	Activity 1	10分	個人
5	発表	5分	
6	解答	8分	
7	場面2の語句の理解	5分	
8	場面2の視聴 ワークシート3枚目の配布	12分	
9	Activity 2	10分	個人
10	発表	5分	
11	解答	8分	
12	まとめ	2分	

この授業展開は4回の授業においてほぼ共通であり、1回の授業は、「語句の確認(5分)→1場面の視聴(平均12分)→活動(10分)→発表・解説(13分)」というサイクルを二度繰り返す形となっている。1場面の視聴時間が平均12分なのは、98分の映画を8場面に分けて視聴しようとしたからである。3.1節で述べたように、この授業を履修する学生の多くは基本的な単語・文法・発音等の知識を有していることから、映画の視聴は英語音声・英語字幕を基本としたが、難語句

を複数含む場面では一部、日本語字幕に切り替え、学習者の内容理解の助けとした。

3.6 教材の構成

1回の授業で配付する資料は、ワークシート3枚と解答用紙1枚である。3枚のワークシートは配布されるタイミングと内容が異なっているので、以下で説明していきたい。

まずワークシートの1枚目が配布されるのは授業の冒頭である。これには一回目の視聴場面について、【英語字幕中の語句】という欄が設けてある。この欄に掲載されている語句の数は10から20であり、そのうち4つの語句の意味が空欄になっている。これは視聴する場面の中で、大学生として知っていることが望ましい語句となっている。次に、ワークシートの2枚目が配布されるのは一回目の映画視聴後である。これには、一回目の視聴場面から抜粋した【スクリプト】、それを利用した【Activity】、二回目の視聴場面の【英語字幕中の語句】、の三つが掲載されている。【スクリプト】の長さは10から20行程度であり、10分ほどの活動時間で読み終わることができるよう配慮した分量となっている。一方、【Activity】の欄はおおむね二種類の設問から構成される。一つは「語用論的な力」を問う問題であり、その文言は「前後の流れに合うよう英文を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう」で統一してある。もう一つは単語・文法の知識を問う問題で、これは空欄補充問題や整序問題などからなる。そして、ワークシートの3枚目が配布されるのは二回目の映画視聴後である。これには二回目の視聴場面から抜粋した【スクリプト】と【Activity】の二つの欄が設けられている。

このように、3枚のワークシートを同時に配布しない理由は二つある。一つは【スクリプト】が手元にならない状態で映画を観てもらうことで、英語音声・英語字幕に集中してもらうことである。【スクリプト】が一部分でも手元にあると、学生はそれを頼りにする傾向がある。もう一つは映画の視聴前に【スクリプト】で空欄となっている箇所がわかると、それを埋めようという意識で映画を観てしまい、その結果、【Activity】の空所補充問題が意味を成さなくなってしまうことである。【スクリプト】が配られて初めて取り上げられた場面がわかるという形にすることで、空所の英語表現を覚えている可能性をできるだけ低くすることを意図した。

3.7 活動の詳細

授業では映画全体を8つの場面に分けたが、ここでは「前後の流れに合うよう英文を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう」という設問を含む4つの場面を取り上げたい。まずは各場面の概要について説明した上で、上記の設問についてどのような解説を行ったかを記す。単語・文法の知識を問う問題の解説は割愛することとした。

第1日〈場面1〉

<p>【スクリプト】</p> <p>Klycznski : You'll be covering 22 patients on rounds today, this floor and next.</p> <p>Kate : Twenty-two?</p> <p>Klycznski : ① _____</p> <p>_____</p> <p>If you get into trouble, beep me, don't make it a habit. The med students will help you out with scutwork. What's he doing here? I ordered an MRI, stat.</p> <p>Woman : Transport said about four hours.</p> <p>Klycznski : He could be (②) in four hours.</p> <p>Never mind. Dr. Forster, MRI. A right, two lefts, elevator to two.</p> <p>Kate : Okay.</p> <p>Klycznski : Follow the signs. Hustle back here for rounds</p> <p>Kate : Dr. Kly...</p> <p>Patient : (③) me somewhere?</p> <p>Kate : I certainly hope so, sir. How are you feeling today?</p> <p>Patient : Am...? Am I gonna make it?</p> <p>Kate : Yes. Absolutely. (3:58-4:35)</p> <p>【Activity】</p> <p>1. 下線部①に前後の流れに合うよう英文を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう。</p> <p>2. 括弧②③に入る語をそれぞれ選びなさい。</p> <p>② ア happy イ all right ウ dead エ confused</p> <p>③ ア Are you taking イ Were you taking ウ Have you taken エ Have you been taking</p>
--

〈場面1〉はKateが新しい病院に赴任し、上司のKlycznskiに院内を案内される場面である。3.3節では、Kateが湖畔の家から引っ越して行った後、Alexがその家に引っ越して来るところから物語が始まると述べたが、これはオープニングテーマが流れる中、映像のみ

の描写となっているので、事実上、〈場面1〉が物語最初の場面となっている。この場面の冒頭で、Klycznskiは病院の廊下を歩きながらKateに、「あなたには22人の患者を担当してもらおう」と伝える。すると、Kateは「22人？」と聞き返す。この台詞に対するKlycznskiの返答が下線部①であり、設問はこの箇所文脈に合った英文を補充した上で、その手がかりとした事柄を日本語で記すものとなっている。学生には「これは記憶力を問う問題ではなく、状況に応じた表現力を問う問題である」と説明し、自身の力で適切な表現を補充するよう促した上で、活動の時間を取った。

映画において空所に入る台詞はQuiet morning.である。これは「静かな朝よ」と述べることで、間接的に「今日の患者は少ない」という意味を伝える表現となっている。解説ではまず、空所には「22人は多くない」という内容を英語で記せば正解とすることを伝えた。つづいて、記述を行う際の手がかりとして挙げたのは、「スクリプト・英語字幕」と「映像・音声」の二つである。前者については、「つづく会話から、Klycznskiはこの病院に長く勤務するベテラン医師であり、22人は別に多くないと考えていることがわかるから」といった内容を解答例とした。また後者については、「Kateが困惑した表情を浮かべながら、驚いた口調でTwenty-two?と聞き返すのに対して、Klycznskiは平然とした表情を保ったまま、淡々とした声色で説明を続けているから」というような内容を解答例として示した。

第2日 〈場面3〉

【スクリプト】
 Henry : Looks smaller. When did he complete it?
 Alex : You weren't born yet, and I was 8.
 Henry : Corbusier meets Frank Lloyd Wright. You know, Dad played cards with both of them.
 Alex : Sharing a joint.
 Henry : Yeah, well...
 Henry : Can't swim.
 Alex : There should be a stairway down to the water, a porch, a deck.
 Here you are in a... in a box. A glass box with a view to everything that's around you...but you can't touch it.
 No interconnection between you and (①) you're

looking at.
 Henry : I don't know, you know. He's got this big maple growing...right in the middle of the house.
 Alex : Containment. Containment and control.
 This house is about ownership, not connection. I mean it's beautiful. Seductive, even.
 But it's incomplete. It was all about him. Dad knew how to build a (②), not a (③).
 But you know...I think he wants us to do what he couldn't.
 But admitting that...would mean admitting that he came up short in some way...that he could do more. And that tortures him.
 Henry : Do you remember (④) here with Mom?
 Alex : I remember she tried to make it work here...with us...with him. (33:48-35:46)

【Activity】
 1. 括弧①④に入る語をそれぞれ選びなさい。
 ① ア when イ where ウ why エ what
 ④ ア being イ to be ウ having being エ me
 2. 括弧②③に前後の流れに合うよう単語を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう。

〈場面3〉はAlexが弟のHenryを湖畔の家へ招き、会話をしている場面である。この会話ではDadという言葉が何度も出てくるが、実は二人の父SimonもまたAlexと同じ建築家であり、湖畔の家を設計したのもSimonである。この直前には、Alexが父の書斎を訪れる場面があり、そこでのやりとりから、Alexは家庭を顧みなかったSimonに対してわだかまりを抱えていることがわかる。〈場面3〉にもそのような心理が表れていて、Alexの父に対する評価が一言で表わされているのが、括弧②③を含む一文である。設問はこの箇所に文脈に合った表現を補充した上で、その手がかりとした事柄を日本語で記すものとなっている。〈場面1〉の設問と同様、学生には「これは記憶力を問う問題ではなく、文脈に合った表現を自分で補充する問題である」と説明し、活動の時間を取った。

映画において空所に入る表現は②がhouse、③がhomeである。括弧を含む文全体は「親父は家の作り方は知っているが、家庭の作り方は知らない」という意味になり、Alexの父に対する皮肉がこめられた表現

となっている。記述を行う際の手がかりとして挙げたのは、〈場面1〉と同様、「スクリプト・英語字幕」と「映像・音声」の二つである。前者については、「この場面からAlexは父の作る家を評価していることがわかるが、一方で、前の場面から、父が家庭を顧みなかったことを許せずにいることが窺えるから」といった内容を解答例とした。また後者については、「Alexが父について語るときの口調や表情から、建築家としては尊敬していても、一家庭人としては軽蔑していることがわかるから」といった内容を解答例として示した。

第3日〈場面6〉

【スクリプト】

Kate : Hey. I have an emergency. Take my shift. Please.

Alex : Hello.

Klycznski : Mr. Wyler?

Alex : Yes.

Klycznski : This is Dr. Klycznski at Chicago City Hospital. ①() () I have some difficult news for you.

Kate : I'm so sorry, Alex. I wish somehow I could be there with you...that we could sit together and look out over the water and the light...in this house your father built. I could be a (②) for you like you've been for me. And tell you that everything is gonna be okay. If I could do one thing for you today...from here...one small, simple thing from the future...I hope this is it. It won't be published for a couple of years...but I don't think you should have to wait that long. ③(helps / it / hope / I / you / know / much / how) you were loved. (1:05:35-1:08:09)

【Activity】

1. 下線部①が「残念なお知らせがあります」という意味になるよう単語を補充しよう。
2. 括弧②に前後の流れに合うよう単語を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう。
3. 下線部③を正しい語順に並び替えよう。

〈場面6〉はAlexの父Simonが病気で亡くなってしまいう場面である。この場面の冒頭で、2006年を生きるKateは勤務する病院のカルテから、2年前のその日にSimonが亡くなっていることに気づく。そして、同僚にシフトを代わってもらい、急いでAlexに手紙を送ろうと湖畔の家に向かう。2004年のちょうどその

頃、Alexは父の担当医であるKlycznskiから、父が亡くなったという連絡を受ける。つづくKateの言葉はAlexに宛てた手紙の文面であり、その中に位置する括弧②の設問は〈場面3〉と同様、文脈に合った表現を補充した上で、その手がかりとした事柄を日本語で記すものとなっている。

映画において空所に入る表現はshoulderである。これは一般的には「肩」を意味するが、この文脈では「支え」という意味であり、I could be a shoulder for youで「あなたの支えになればいいんだけど」という内容の表現となっている。記述を行う際の手がかりとして挙げたのは、これまでと同様、「スクリプト・英語字幕」と「映像・音声」の二つである。前者については、「Kateの手紙の内容から、何とかAlexを慰めたいという思いが伝わってくるから」といった内容を正解とした。また後者については、「映画では湖畔にたたずむKateが手紙の文面を読み上げる形となっているが、その表情や口調からAlexと同じくらい父の死を悲しんでいることがわかるから」という内容を正答例として挙げた。

第4日〈場面7〉

【スクリプト】

Alex: Don't give up on me, Kate. What about *Persuasion*? You told me. They wait.

They meet again, they have another chance.

Kate : Life is not a book, Alex. And it can be (①) in a second. I was having lunch with my mother at Daley Plaza...and a man was killed right in front of me. He died in my arms. And I thought: "It can't end just like that on Valentine's Day." I thought about all the people who love him, waiting at home...who will never see him again. And then I thought: "What if there is no one?" What if you live your whole life and no one is waiting? So I drove to the lake house looking for any kind of answer. And I found you. And I let myself get lost. Lost in this beautiful fantasy where time (②) still. But it's not real, Alex. I have to learn to live the life that I have got. Please don't write anymore. Don't try to find me. Let me ③ _____ . (1:14:00-1:15:12)

【Activity】

1. 括弧①に前後の流れに合うよう単語を補充しよう。
2. 括弧②に入る語を以下から選びなさい。

ア came イ went ウ stood エ remained

3. 下線部③に前後の流れに合うよう単語を補充しよう。その際、何をどのように手がかりにしたか書こう。

〈場面 7〉は Kate が Alex との別れを決意する場面である。この直前で二人は手紙をやりとりし、Kate にとっての翌日に会う約束をする。Alex にとっては 2 年後のことになるが、約束さえ交わせば、Kate の生きる時間軸の中ですぐに会えると二人は考えたのだった。そうして迎えた当日、Kate はレストランで Alex を待ち続ける。しかし Alex は一向に表れない。結局この日、二人は会えないまま時間は過ぎ去り、Kate はそのことを手紙で告げる。それにつづくのがこの場面冒頭の Alex の言葉である。Alex は *Persuasion* を引き合いに出しながら、Kate にあきらめないよう説得するが、Kate の決意は固く、もう手紙は書かないようお願いする。この手紙の最後の言葉となるのが下線部③を含む一文であり、設問はこれまでと同様、文脈に合った表現を補充する問題となっている。

映画において空所に入る表現は *let you go* である。一般に「*let...go*」という表現は、「...を行かせる」「...を自由にする」という意味であり、この手紙における *Let me let you go* は全体で「あなたを忘れさせて」といった内容となる。記述を行う際の手がかりとして挙げたのは、これまでの設問と同様、「スクリプト・英語字幕」と「映像・音声」の二つである。前者については、「手紙の内容から、Kate は Alex と別れたいと考えていることがわかるから」といった内容を解答例とした。また後者については、「手紙を読み上げる Kate の声色から、これ以上 Alex と付き合い続けるのはつらいと思っていることが窺えるから」といった内容を正解とした。

4. 分析

4.1 方法

第 3 章では、映画を用いた実践内容について実際に扱った教材を提示しながら述べてきたが、第 4 章では、このような教材を使用し英語表現を産出する活動を行う際、映画のどの特徴がいかに助けとなっているのかを整理する。そのために、最終日に実施したアンケー

トと各授業で扱った解答用紙を分析した（実際の解答用紙とアンケート用紙はそれぞれ資料 1, 2 として末尾に付したので参照されたい）。

対象の学生を絞るにあたり、まず、全クラスのアンケート回答を執筆者らが共同で確認し、映画の特徴である映像や音声から得られる情報を記入していた学生を選んだ。その後、この学生らの第 1 日から第 4 日までの計 4 日分の解答用紙を調べ、そのうち 2 日以上、映像や音声に関連する記述をしていた学生 7 名を抽出した。ここで 2 日以上と設定した理由は、映像や音声に関する情報について偶然記述されたのではなく、意図的に言及されたことが窺える学生の解答を対象としたかったからである。また、その際、2 日以上であれば第 1 日から第 4 日のどの解答用紙を選ぶかについては特に限定しないこととした。結果的に、7 名全員の 2 日分の解答用紙が分析の対象となった。

このような手順で対象を決定した後、抽出した学生のアンケート回答の記述を整理し、それが解答用紙の記述にはどのように表れているのかを具体的な場面に即して見ていくことで、学生らが映画の持つ要素を用いながら解答を導く様子を確認することとした。

4.2 アンケートの記述

アンケートは自由記述式で、その問いは、「全 4 回を通じ、『何をどのように手がかりにしたか』を考えながら、英語表現を記入する活動をしましたが、どのようなことを学びましたか?」である。このアンケート作成の背景には、学生が文脈を踏まえ英語で表現する練習を行う過程で、映画の何がどのように役立っただと感じていたのかを把握したいという執筆者らの意図がある。下記の表は、該当する学生 7 名のアンケート回答の一覧である。学生の名前は全て仮名とした。

この表を基に、学生らが映画を視聴し文脈に合った英語表現を書く活動を振り返る中で、映画の何がどのように役立っただと捉えているのかを詳しく見ていきたい。学生らは、映画の特徴である映像や音声から得られる手がかりをどのような言葉で表現しているのだろうか。まず、映像に関しては、「役者の表情」や「イメージ」が挙げられている。次に、音声については、「前後のセリフ」や「声のトーン」などが挙げられた。そして、映像と音声の両方に関係するものとしては、「空気感」、「場面の雰囲気」、「演技」、「文脈」などの記述が見られる。

次に、これらの要素が英語表現を記入する上で、どのように助けとなったと感じたかを整理する。多少重

学生 (仮名)	アンケートの記述
山田	映像であるからこそ感じられる空気感と前後のセリフから「気持ち」を感じとりつつ、言葉を選ぶように心がけた。
山崎	ただ聞いたのを書くよりも、映像と前後から根拠を得ることで文に合う語が何個もあつたり、様々な書き方で書けることに気づいた。話の流れがきちんとわかるようにつくってあるものだなあと感じた。
中岡	場面の雰囲気と表情から内容を容易に想像できるからおもしろかった。また、日常使われている英語は簡単だった。独特な表現も少しあって勉強になった。何となく英語のニュアンス部分をつかんだ気がする。
竹山	映画では、役者の表情をみながら英文をみることができると、演技をみて、自分の理解できなかった英語を予想し、文として理解した。
福田	文脈から理解することが多かった。こういう穴うめ問題じゃなくても、分からない文があつた時に人物の表情や前のセリフから想像したりするから普段から無意識的にやっているんだなと思った。
野川	スクリプトから文脈を判断して記入することもできるが、映像があることで役者の表情などから、入るおおよその内容が分かるということに気づいた。
松下	初めて英語音声・字幕で映画を見たが、映像と声のトーン、イメージなどで案外みられるものだなと思いました。前の文の流れが重要なんだなと思った。

なる部分はあるものの、大きく分けて、主に4つの観点から示すことができる。

まず、登場人物の心情を理解することができるという点である。例えば、「映像であるからこそ感じられる空気感と前後のセリフから『気持ち』を感じとりつつ、言葉を選ぶように心がけた。」(山田)という回答がそれを示している。この学生にとって、映画の映像から分かる「空気感」や音声から得られる「セリフ」が、話者の心情を読み取りそれを表すのに相応しい英語表現を選択するという点において助けとなったと言える。

そして、物語の内容を把握する、または、想像することができるという点である。「初めて英語音声・字幕で映画を見たが、映像と声のトーン、イメージなどで案外みられるものだなと思いました。前の文の流れが重要なんだなと思った。」(松下)、「話の流れがきちんとわかるようにつくってあるものだなあと感じた。」(山崎)、「場面の雰囲気と表情から内容を容易に想像できるからおもしろかった。」(中岡)などが例として挙げられる。映画の映像に映し出される「場面の雰囲気」や「表情」などと、音声で表される「声のトーン」などが、個別の場面の状況や物語全体の流れを把握す

ることを容易にし、それが設問を解く上で有益であったと感じていた記述が見られる。

さらに、文脈に合った英語表現の多様性に気付くことができるという点も挙げられている。「ただ聞いたのを書くよりも、映像と前後から根拠を得ることで文に合う語が何個もあつたり、様々な書き方で書けることに気づいた。」(山崎)や「日常使われている英語は簡単だった。独特な表現も少しあって勉強になった。何となく英語のニュアンス部分をつかんだ気がする。」(中岡)などがその例である。映像や音声から捉えられる情報を根拠とすることで、場面に合う英語表現がいくつかあることを知ったり、表現の微妙な意味合いやそのわずかな差異に気付いたりしながら、活動に取り組むことができたと感じたのだろう。

最後に、分からない英語表現を予測することができるという点である。例えば、「映画では、役者の表情をみながら英文をみることができると、演技をみて、自分の理解できなかった英語を予想し、文として理解した。」(竹山)、「文脈から理解することが多かった。こういう穴うめ問題じゃなくても、分からない文があつた時に人物の表情や前のセリフから想像したりするから普段から無意識的にやっているんだなと思った。」(福田)、「スクリプトから文脈を判断して記入することもできるが、映像があることで役者の表情などから、入るおおよその内容が分かるということに気づいた。」(野川)などの回答にそれが示されている。映画の映像や音声に含まれる情報を頼りにすることで、話者のセリフの中に含まれる英語表現を予想することができ、設問を解く上で役立つと感じていると言える。

このように、学生らは映画の映像や音声から得られる視覚的・聴覚的な情報を総合的に踏まえて、登場人物の心情を理解する、物語の内容を把握したり想像したりする、文脈に合った英語表現の多様性に気付く、分からない英語表現を予測する、といったことを行いながら、文脈に合った英語表現を書く練習をしていたことが確認できた。次節では、これらが解答用紙にどのように表れているのかを場面に即して見ていきたい。

4.3 解答用紙の記述

計4回の授業実践の全てに、文脈に合った英語表現を記入した上で「何をどのように手がかりにしたか」を書く活動を含めた。本節では、この活動に関する解答用紙の記述を見ていくことで、前述したアンケート

回答において映画の映像や音声に触れながら振り返りを行った学生が、実際の授業の中で映画の何をどのように参考にし設問を解いていたのかを探る。とくに、映画の特徴がどのように助けとなっているのかに焦点を当てるため、設問における質問項目の一つである「何をどのように手がかりにしたか」に対する記述を分析の対象とした。

以下の表は、対象学生 7 名の解答用紙の記述を示している。なお、4.1 節で述べた理由により、学生 1 名あたり、2 日分の解答を分析の対象とし、それらが第 1 日から第 4 日のどれであるかは限定していない。

この 7 名の解答をアンケート結果と照らし合わせて整理していく。まず、映画から得られる情報を用いて、登場人物の心情を理解しながら、文脈に即した英語表現を記入したことを述べていた山田に着目する。アンケートでは、「映像であるからこそ感じられる空気感と前後のセリフから『気持ち』を感じとりつつ、言葉を選ぶように心がけた。」と記しているが、ここでこの学生が映画から得られる手がかりだと感じた「空気感」とは具体的に、第 1 日の「年配の先生の忙しい様子」や「ケイトが自分の受け持つ患者の数に驚いた様子」を指しているのだろう。また、第 4 日の「ケイトの物悲しい顔」という表現にも、この学生の言う「空気感」が表れているようである。登場人物の表情に着目したことはアンケート回答に明記されていないが、「映像であるからこそ感じられる空気感」には、解答の「ケイトの物悲しい顔」に反映されている話者の心情を示す表情も含むのではないだろうか。そして、アンケート回答が示す、もう一つの手がかりだと言える「前後のセリフ」については、第 4 日の「Don't try to find me」という言葉」という記述に表れている。Kate の悲しさや切なさの込められた声色で表されるセリフに着目し、彼女の気持ちを感じ取ろうとしたのだろう。

次に、映画の特徴を手がかりに、物語の内容を把握したり想像したりしながら、設問に取り組んだと述べた学生について見ていく。例えば、中岡はアンケートに「場面の雰囲気と表情から内容を容易に想像できるからおもしろかった。」と記入しているが、第 1 日の解答用紙においては、「22 人もの患者の回診が簡単なことから、たった 22 人というニュアンスを表したかった。Kate は多いと思っているから疑問を持っているのに Klycznski はいたって普通な様子だった。」と述べている。映像からわかる Kate や Klycznski の表情などを基に、この場面の病院の状況を思い浮かべた様子が窺

学生 (仮名)	解答用紙の記述	
山田	第 1 日	第 4 日
	年配の先生の忙しい様子とケイトが自分の受け持つ患者の数に驚いた様子から。	“Don't try to find me”という言葉とケイトの物悲しい顔を手がかりとした。
山崎	第 1 日	第 4 日
	Kate は 22 人？と驚いているが、Klycznski は急いで行ってしまう（落ち着いている）ため。	直前でもう手紙を出さないので、探さないでと拒絶しているところから。
中岡	第 1 日	第 4 日
	22 人もの患者の回診が簡単なことから、たった 22 人というニュアンスを表したかった。Kate は多いと思っているから疑問を持っているのに Klycznski はいたって普通な様子だった。	悲しげな雰囲気だったので、「探さないで」（＝別れ）といったものが入るかなと思いました。
竹山	第 2 日	第 4 日
	前の場面で父親と Alex は上手くいっていないように描かれていたため。	もう会うことはできないといった内容を前文で話しているため。
福田	第 1 日	第 4 日
	先生は忙しいようにしていて、ケイトが新人だということにかまわず、それくらいやってよというニュアンスがありそうだから（先生の言語を早口でしゃべる様子から）。	ケイトはもうアレックスとの関係を断とうとしているのが前のセリフから分かるから。
野川	第 2 日	第 4 日
	Alex は父のできなかったことをやりたいと考えている。映像より、Alex と父とで何らかの距離があった。	Kate は Alex と距離をおきたがっている。
松下	第 2 日	第 4 日
	前の文を参考にした。映画を見るかぎり、人付き合いが苦手そうだったから、connection にした。	マイナスのイメージの語が入ると思った。

える。また、「話の流れがきちんとわかるようにつくってあるものだなあと感じた。」とアンケートに記した山崎は、第 1 日の解答用紙において、「Kate は 22 人？と驚いているが、Klycznski は急いで行ってしまう（落ち着いている）ため。」と記述し、各登場人物の表情や動作を手がかりに、この 2 人の対話から成る物語の流れを踏まえていることが示されている。

そして、映画の映像や音声から得られる情報を基に、文脈に合った英語表現の多様性に気付きながら、英語表現を記入したと回答した学生に着目したい。アンケートにおいて「日常使われている英語は簡単だっ

た。独特な表現も少しあって勉強になった。何となく英語のニュアンス部分をつかんだ気がする。」と回答した中岡がその一例として挙げられる。中岡は、第4日の解答用紙で「悲しげな雰囲気だったので、『探さないで』（＝別れ）といったものが入るかなと思いました。」と述べている。ここでは、映画の映像や音声から読み取った「別れたい」という登場人物の気持ちを「探さないで」と置き換えているが、該当し得る表現がいくつか存在することを設問を解く中で実感しながら、この学生が感じた「悲しい雰囲気」を示すのに最も適した表現を選ぼうと模索したことが窺える。

最後に、映画の映像や音声から得られることを参考に、分からない英語表現を予測しながら設問を解いたと述べていた学生についても、その様子が解答の中に確認できる。例えば、アンケートで「文脈から理解することが多かった。こういう穴うめ問題じゃなくても、分からない文があった時に人物の表情や前のセリフから想像したりするから普段から無意識的にやっているんだなと思った。」と記述した福田は、第1日の解答用紙で、「先生は忙しそうにしている、ケイトが新人だということにかまわず、それくらいやってよというニュアンスがありそうだから（先生の言葉を早口でしゃべる様子から）」と述べている。「ニュアンスがありそうだから」という記述に表れているように、この場面で使用されていた英語表現を完全には理解していなかったようだが、「先生の言葉を早口でしゃべる様子から」に示されているような映像や音声から得られるヒントを基に、この場面に相応しい英語表現を探ろうと試みた様子が見受けられる。

本章では、アンケートにおいて映画の特徴と言える映像や音声に関する言及が見られた学生らの解答用紙を調べることで、彼らが映画の映像や音声から得られる情報を参考にしながら解答を導いていく様相を場面に即した具体例と共に示した。分析の結果、学生らは、文脈に合った英語表現を書く活動に取り組む中で、映画が含む要素を個別に、あるいは総合的に手がかりにしながら、登場人物の心情を理解する、物語の内容を把握したり想像したりする、文脈に合った英語表現の多様性に気付く、分からない英語表現を予測する、といったことを行い、設問と向き合っていたことが確認できた。

5. 考察

本論文の目的は、大学英語教育における映画を用いた教材や活動を提示し、それに対する学習者の反応を分析することであった。そうすることで、実際に学習者が映画の映像と音声をどのように活用しているのかを明らかにし、映画の英語教材としての可能性を探ることを目指した。そのために、まず、第3章で、文脈に合った英語表現を記入させた上で何をどのように手がかりにしたかを述べさせる活動を、本実践のために作成した教材に即して示した。

そして、第4章では、学習者は映画のどの特徴をいかに手がかりにし、英語表現を産出しているのかを調査するため、アンケートと解答用紙に記されたデータを分析した。その結果、以下のことが明らかとなった。学習者は、文脈に合った英語表現を記入する活動を実施する過程で、映画の持つ要素を個別に、あるいは、総合的に参考にし、登場人物の心情を理解する、物語の内容を把握したり想像したりする、文脈に合った英語表現の多様性に気付く、分からない英語表現を予測する、といったことを行いながら正しい解答を導こうとしていたことである。加えて、映画特有の要素のおかげで、それが容易にできたり、ストーリーの内容がおもしろいと感じられたりしたことも見受けられた。つまり、映画の特徴が文脈に合った英語表現を産出する上で重要な補助となったり、関心を深める要因となったりしたのだと考えられる。これを踏まえると、本論文は、実際の学生の反応を基に、文脈に合った英語表現を考えたり書いたりする練習を行う際の映画の教材としての強みが整理されたという意味で、意義のあるものとなったと言える。

ただし、このような強みを持った映画を教材としてより有効に用いるためには、どのような設問を作成するのかや、活動後にどのように解説を行うのが鍵となる。例えば、上述した観点のうち、文脈に合った英語表現の多様性に気付くという点については、このことを促したり、生まれた気付きをより深い理解へつなげることが大切である。場面に合う英語表現をいくつか挙げた上で最も相応しいものを記入するといった二段階方式の設問を作成することなどがその方法の一つかもしれない。

そして、今回の分析結果が示すように、学生は映画の映像や音声から得られる情報をヒントにして英語表現を産出しようと試みていたのであるから、例えば教員が選択肢として有り得る英語表現を数例提示しなが

ら解説を行う場合には、その場面に相応しい声のトーンなどと共に教えられる知識を持つておくことも必要だろう。当然ながら、教員がそのような英語の話し方を日常的にしなければならないという意味ではなく、英語圏において標準的に示されるものの一例として手本を見せられる状態であることが大切だということである。映画の教材としての強みを活かすため、本研究で得られた学生の声を基に、より学習者の学びを深められるような教材作成や使用方法に関する工夫が重要であると言える。

6. おわりに

今回の実践では様々なジャンルの英語素材を扱う年間シラバスの中で、映画を用いた実践を行った。今日の大学英語教育は「国際化社会」と呼ばれる状況の下、英語運用能力の育成を求められるようになって久しいが、その中でどのような教材を用いるかは重要な点の一つである。今回、数ある英語教材の中で映画がどのような特徴を持った素材であるかの一端について明らかにできたことは、意義のあることであつたと考える。

今後の課題は二つある。一つは映画の特徴を生かした活動の考案である。もし映画に含まれる映像と音声理解・表現を促すのならば、最初からそのことに焦点を当てた活動を設定することが可能になる。例えば、今回の『イルマーレ』では“I'm afraid SV.”という表現が使用されているが、この表現に関して「誰が、どのような状況で、どのような表情や声のトーンで用いていたかを説明しなさい」という設問を設定することができる。このように、ある表現を映像と音声を伴った具体的な場面で学ぶことは、自身が適切な状況でその表現を使う助けとなるはずである。

もう一つは「表現」の活動についての再検討である。今回、「表現」の活動は一語から数語を補充する問題に止めたが、まずこの補充問題の難易度が適当であつたかという点について疑問が残る。とくに〈場面6〉のshoulderを補充する問題は解答できた学生が他の問題に比べて少なく、したがって、その手がかりを記述できた者も少なかった。3.2節で述べたように、表現を行う過程で試行錯誤することは、自他の言語表現について敏感になる上で有効な手立てとなるが、何も解答できないような難易度だと、そこから学べることは少なくなってしまう。もちろん、結果として無解答であつただけで、その過程で思考を巡らせ、解答・解説から何かを学んだ可能性はあるが、無解答ではそのこ

と自体確認できない。難易度については再考を要すると言える。

以上のような課題を踏まえながら、今後も英語映画を教材とした実践について研究を深めてきたい。

付記

本論文は1, 2, 3, 6を榎木が、4, 5をショルティが執筆している。

参考資料

- 秋田喜代美 (2015) 「言語力としてのメタ文法能力の育成」 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編) 『カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて』 東京大学出版会, pp.53-64
- 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学 (編) (2005) 『教育研究のメソドロジ—学校参加型マインドへのいざない』 東京大学出版会
- 秋田喜代美・藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・榎木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子 (2013) 「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第52巻, pp.337-366
- 秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦・藤森千尋・榎木貴之・王林鋒・三瓶ゆき・大井和彦 (2015) 「メタ文法能力育成をめざしたカリキュラム開発—実践と教材開発を通じたメタ文法カリキュラムの展望」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第54巻, pp.355-388
- アレグスティ, A. (監督), オーバーン, D. (脚本) (2006) 『イルマーレ』 [DVD], ワーナー・ホーム・ビデオ
- アロット, N. (著), 今井邦彦 (監訳) (2014) 『語用論キーターム事典』 開拓社
- 池上嘉彦 (1995) 『(英文法) を考える—〈文法〉と〈コミュニケーション〉の間』 筑摩書房
- 石原紀子 (編著), コーエン, A.D. (著) (2015) 『多文化理解の語学教育—語用論的指導への招待』 研究社
- 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論』 開拓社
- 馬本勉 (1995) 「語用論的アプローチによる語彙指導—映画教材の可能性」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 第25号, pp.189-195
- 川崎沙織・榎木貴之 (2016) 「映画を用いた大学英語授業—語用論的力の育成をめざして」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第55巻, pp.395-406
- ショルティ沙織・榎木貴之 (2017) 「映画を用いた大学英語授業—語用論的力の育成をめざした事例の検討」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 第56巻, pp.421-436
- 大学英語教育学会 (監修), 森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一 (編) (2010) 『英語教育学大系 第1巻 大学英語教育学 その方向性と諸分野』 大修館書店
- 田崎清忠 (編集責任) (1995) 『現代英語教授法総覧』 大修館書店
- 中島信男 (編) (2012) 『朝倉日英対照言語学シリーズ7 語用論』 朝倉書店
- 榎木貴之・久世恭子 (2014) 「英語絵本を用いた言語横断的授業—ことばへの気づきと解釈する力を育むために」 『言語情報科学』

